

(4) カボチャ

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
べと病 (<i>Pseudoperonospora</i>)	①敷きわらを十分施し、土壌表面から病原菌がはね上がるのを防ぐ。 ②肥料切れさせない。ただし、窒素過多にならないようにする。 【参考事項】 20～25℃前後で多湿な条件下で多発する。 降雨と肥料切れが重なると発病が多くなる。 感染は気孔から行われる。
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①排水を良くして、水たまりができないようにする。 ②定植時に株元を高くする。 ③敷きわらは地面が見えない程度に十分施し、溝につるが落ちないようにする。 ④発病株を早期に発見し、適切に処分する。 ⑤果実の収穫は晴天時に行い、収穫果は風通しの良い場所に保管する。 ⑥収穫後、茎葉を適切に処分する。 ⑦連作を避ける。 【参考事項】 生育適温は28～30℃で、多湿条件が重なると多発する。 低湿地で発病が多いので、まわりから浸冠水するようなほ場での栽培は避ける。 収穫時には外観上健全でも、出荷後に市場で発病することがある。 未熟果は発病しやすい。 病原菌は多犯性でトマト、キュウリ、ピーマン、トウガラシ、ナス、スイカなどでも病気を引き起こす。
うどんこ病 (<i>Podosphaera</i>)	①窒素肥料の過用を避ける。 ②老化した下位葉は伝染源となりやすいので、除去するとともに風通しをよくする。 ③収穫後、発病茎葉を適切に処分する。 【参考事項】 病原菌は各種ウリ類に共通のうどんこ病菌である。 子葉や下位葉の裏面から発生する傾向がある。
アブラムシ類	①畝面全体をシルバーフィルムで被覆する。 ②周辺雑草を除草する。 【参考事項】 ワタアブラムシが主要種である。  ワタアブラムシ
コナジラミ類	①周辺雑草を除草する。 【参考事項】 タバココナジラミ (パイオタイプB) が寄生した株の葉は白化する。  タバココナジラミ成虫  タバココナジラミ幼虫
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタリヤ・スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールド、えん麦などが有効 ②太陽熱消毒を行う (土壌病害虫の防除法の項参照)。 ③有機物を施用する。 【参考事項】 カボチャではネコブセンチュウによる被害が大きい。 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウの天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。